

時雨にもみつ

初冬に降る雨を時雨しぐれという。日常語として使う人は減っただろうが、詩歌のなかではみかけることばである。時雨は、万葉集で約四十首に詠まれている。次の歌はその内の一首である。



紅葉する談山神社境内
(撮影：松田信彦)

時待ちて 降りし時雨の 雨止みぬ
明けむ朝あしたか 山のもみたむ

(巻八一—五五二)

〈季節を迎えて降った時雨は止んだ。明日の朝には山が黄葉していることだろう〉という意味である。

この歌は秋の雑歌に分類されていることから、当時の時雨は秋に降る雨と捉えられていたとみられる。現在のように初冬の雨の意で定着するのは、平安朝になってからである。

また、時雨が降ったあとに山が紅葉することが予想されているので、時雨が植物の紅葉を促すとも考えられていたようである。季節の到来により時雨が降り、木々が劇的に色を変えるところであり、時雨は秋の象徴的なことばであったと考えられる。

万葉集ではほかに、時雨が紅葉を散らすという歌もみられる。平安朝の歌ではむしろこちらが主流となっていく。紅葉するのは秋であるが紅葉が散るのは冬であるから、平安以降は時雨が冬の雨を指すようになったとみられる。

ところで、万葉集はもともとすべて漢字で書かれている。時雨は実際には「鍾礼」「四具礼」などであり、「時雨」と書かれるようになったのは十七世紀以降である。ちなみに万葉集で紅葉はほぼ「黄」葉と書かれている。

「鍾」の字はシグという音を表したものであるが、この字にはもともと集まるという意がある。時雨は多くの辞書で初冬の小雨こよめとされるが、万葉集では別に「小雨」の例がある。そこに時雨のような季節感はなく、時雨の歌からは小雨という意味が取りにくい。だとすれば集中して降る雨をシグレといったので「鍾」をあてた可能性もある。「時雨の雨」という表現から考えると、もともとは雲などが集まっている状態をシグレといったのかもしれない。平家物語に、密集する意のシグラムという語があるのも示唆的である。

この季節、日本文化の根源にあるやまとことばと漢字の融合を思いつつ、時雨と黄葉を観るのも一興かと思う。

(万葉古代学研究所 主任研究員 井上さやか)